
永遠の子供たち

四君子 月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の子供たち

【Nコード】

N1024C

【作者名】

四君子 月

【あらすじ】

誇らかに咲くには早すぎて。徒の花よとつそぶくには遅すぎて。そんな季節だった。あいつと出会ったのは。ふたりの少女の物語。

サクラ咲くころに

誇らかに咲くには早すぎて。

徒の花よと嘯くには遅すぎて。

そんな季節だった。

あいつと会ったのは

ち

く 永遠の子供た

「どうしたの、そんなところで？」

准は、急に声をかけられて戸惑った。

相手の容貌がとくに変わっているわけではない。

むしろ愛らしく、明るい活発な少女、という感じだった。

この年齢にしては、少し小柄なくらいだろう。

なんの疑いもなく、日々の生活が無邪気に享受しているように見えた。

准が戸惑ったのは、その少女があまりにも普通だったからだ。

今まで、珍しがられたり逆に避けられたりはしても、

このように無防備に、あけすけに、声をかけてくるものなどいなかった。

いや、いた。

昔は「不良」と呼ばれたであろう類の、ゴロツキどもだ。

准を見るや、こちらは睨んだわけでもないのに、からんでくる。まあ、准にしてみれば好都合ではあったが。

だから、戸惑った。この少女が声をかけてくるとは。准は、「ふつう」ではなかったから。

「何か、俺に用か？」

仕方なく、こんなありきたりな質問をする。

「だからあ、なんでそんなところにいるの？式はあっちだよ」

少女が校庭の中央を指差す。まだ幼さを残す、その指で。

准はまた戸惑った。

なんでこんな少女が、俺を始業式なんぞに誘うのか。

「あっちいってろ」

ふう、とひとつため息をつき、

邪魔そうに言った。これで、追い払えるだろう。

声をかけられる前のように、准は、木にもたれかかり、腕を組んだ。

そして、瞳を、閉じた。

拒絶の合図である。

風が、心地よかった。

今年は、例年より寒く、始業式だというのに、桜の花はつぼんだままだった。

その太い幹に寄りかかり、准は静かに立っていた。

眠っているようにも見え、瞑想をしているようにも見えた。

准が声をかけられないのには、その風貌のせいもあった。

学ランを着てはいたが、ボタンは全てはずし、中のシャツも少しはだけていた。

背中までかかる髪は、染めているようにしか見えなかった。

だが、それだけなら、ここまで避けられるようなこともなかっただろう。

雰囲気・・・とでもいうのか。なにか、准のまわりには、見えない壁のようなものがあつた。それはとてもぴりぴりとしていて、うかつに触れたら、こちらの手が切られてしまいそうだった。そしてなにより、瞳が他の人間を拒絶していた。なにか、世の中の全てを敵とみなしているかのようだった。常に鋭く、常に孤独だった。なにをしようになったものか、ただの反抗期の瞳とは、あまりにもかけ離れていた。その瞳を、准は静かに開けた

「まだいたのか」
かなり呆れた口調だった。

先ほどの少女が、まだ同じ位置にいたのである。

「あなたこそ、いつまでそうしてるつもり？」

「この式が終わるまでだろ」

「式に出るなら、ちゃんとでなさい！」

「お前こそ出るよ」

「あ！わかった！！」

「？」

「あなた、不良ねっ！！！！」

准は、きれいにコケた・・・。

なんともいい日和だった。

始業式はおに過ぎ、つぼんですらいなかった花たちも、今を盛りと咲いていた。

「准ちゃん！」

見上げて、青い色など垣間見えぬほど、そこは桜色で埋まってい

た。

たいていの学校にはあるであろう、このトンネル。

いかにも日本人らしいその一貫性も、この気分の良さのもとでは許されるだろう。

「准ちゃん!!」

この分だと、花散るころは、さぞかし・・・

「准ちゃん!!!!」

「うるせえっ!!!!!!」

先ほどからしつこく付きまってくるこの少女に、准は一括をくれてやった。

「なによ。さつきから呼んでるのに、無視する方が悪いんですよ」「んで気にしたふうもなく、少女は言い返す。

「うわあ。とつてもきれいだね!」

空を見上げて、とても明快な感想を述べた。

「ところでな。その、『ちゃん』っての、どうにかならないか?」

「どうして? 准ちゃんは准ちゃんでしょ?」

「でかい声で呼ばれる身にもなれ」

「あ。恥ずかしいんだ!」

けたけたと、少女は笑った。

「俺の風体見て、少しは引けよ」

准が言うのもむべなるかな。

おとなしく学ランを着ていたのも初日だけ。

今は、首まである黒のタンクトップに白のスボン、ベルトを巻いたブーツ姿である。

当然、しよっぱなから呼び出しを食らったが、一向に変える気配もない。

そんな准に、仲良くしましょうと、声をかけるつわものとても無く。「そう言えば、不思議だよな。准ちゃん、なんで初日、学ランだったの?」

「そつちかよ・・・」

この少女の無邪気さに、少々呆れながら、呟いた。

いつものように、准は屋上で、寝転がっていた。

空は広く限りなく、僕らの夢だった。

突然ぬつと翳りが生じた。

少女の顔が、間近にあった。

「准ちゃん。お昼食べよう」

「もう食った」

「えーーーーー!!!」

なによ、ずるい、とぼやきながら、少女はそこに弁当を広げ、とつとと食べ始めた。

准は相変わらず寝転がりながら空を眺めていたが、何を思ったか突然口を開いた。

「お前、そう言えば、名前は？」

「桜子。みんなには、似合わないって言われるけど」

そう言って笑う少女を見ながら、准はひまわりみたいだと思った。

窓際の席というのは、なんとも罪作りである。

お昼の後のこないだの陽気の中で、授業に集中しろと言うのは無理な話だ。

景色もいいし、窓からは心地よい風と、寝ろ、といわんばかりなほかほか日差しが入ってくる。

外では、サッカーをやっている。体育着姿の生徒たちが、ボールを追いかけっこしている。

(どうせなら蹴鞠でもやりゃあいいのに)

本来、心身ともに鍛えられるはずの伝統を捨て、どこまでも欧米隷属主義な母国に心の中で見当違いなけちをつけながら、准は眺めていた。

と。

喧嘩が始まった。

やいのやいのと文句を言い合っていたのが、いつの間にやら取っ組み合いの大喧嘩。

止めようという殊勝な者とてなく、野次馬ばかりが窓から首を出している様は、さながらゲートが開く前の競馬場である。

ひとつ、豆粒みたいな影が、運動場にすつとんでいった。

ひどく小さな体を精一杯広げて、喧嘩の仲裁に入っている。

「またあいつかよ・・・」

准は頭をかかえながら、ひとり呟いた。

「なんで、好んであんなのに付き合っただよ」

開口一番、昏問のできごとを問いただす。

あの小さな影は、桜子である。喧嘩が始まると、かならず仲裁役を買ってでる。

これで三度目だ。

「准ちゃんこそ、どーしてほつとくのよ?」

逆に怒りながら、こちらに問い返してくる。

「本人たちがやりたくてやってんだ。ほつときゃいいじゃねーか」

「誰かが傷つくのよ。止めるのが普通でしょ!」

その「普通」が自分以外ひとりもないことには、気がついていないらしい。

馬鹿というか天性のお人よしというか。。。

「痛い目に会う前に、やめておけ」

「痛い目」は、意外と早くやってきた。

その日は、雨雲が漂っていて、まだ春だというのに、梅雨のようにじめじめしていた。

授業が終わり、みな帰ろうと校門に向かっていった。

誰よりも早く門をくぐろうとしたのが、彼の不運であった。

ボディブローをもろに食らうと、倒れる間も与えられず、襟首をつかまれた。

「なあ、おい。髪の毛の長い、私服の野郎がいるだろ。頭の悪そうな色に、染めてる奴」

自分のほうが十二分に頭が悪そうであるが、その辺は気がつかないらしい。

「ちよつとよー。呼んできてくれねーかなー。あ？」

「おい、そいつもう気絶してるって」

笑いながら、もうひとりが言う。

「おやおや。ここの生徒さんはやわで困るねえ。」

「しょうがねえ。こいつ餌にして、呼び出すか」

5、6人いる。

どいつも染めたり剃ったりしている、いわゆる「ワル」である。

何の用事か、他校から、わざわざ来たらしい。

「おい。早く来ねーと、死んじまうぞー」

ハハハ、と笑いながら、複数で一人の生徒をけつたり殴つたりしている。

卑怯きわまりないが、助けに入ったが最後、今度やられるのは自分だ。

そんな思いままでしてわざわざ赤の他人を助ける馬鹿はいない。

「ちよつと！やめなさいよ！ー！」

いた。桜子だ。

「あんたたち、ひとりじゃ何もできないくせに！」
踏んではいけない地雷を思いつきり踏んづけて、桜子は、ゴロツキに囲まれた。

いくらなんでも、無茶である。そもそもこんな凶悪そうなゴロツキに、体格差だけでもかなわない。桜子は武芸・武術には全く縁がない。食物連鎖の一番下だ。さすがにこれで手をあげたら、外道である。

バシッ

どう、という音とともに、小柄な体が砂煙をあげた。

「っせーんだよ！」

残念ながら、外道だったようだ。

「ひとりじゃ何もできないかどうか、てめーで確かめてやるうか？あ？」

言うと桜子の頭を踏みつけ、足に力を込めた。

「おらおら、てめーはひとりで、何ができるってんだよ？」

ハハハッと笑うと、なおも桜子の顔を地面にめりこませた。

「はっ。ちびのくせに、大口たたきやがって」

頭を踏みつけていた足があがると、うしろへ引き、顔面めがけて一気に振り下ろされた！

蹴りは、放たれなかった。顔面への衝撃を覚悟していた桜子は、そつと、片目を開けた。

蒼。蒼が、その場を支配した。

それが、髪の毛だと気がつくのに、少しかかった。

「無茶をするな、あほ」

准が、傍らに立っていた。静かにたたずむその姿からは、殺気によ

うなものは感じ取れなかった。静かに・・・ただ静かに。それはまるで、瞑想でもしているかのように。水面に小石を投げるのは誰なのか。桜子は、初めて准に出会った時のことを思い出していた。あの時も、准は静かに立っていた・・・。

「痛っ！ててててて・・・」

桜子の思い出を吹き飛ばす、汚い声でした。

「つてめえ・・・。何しやがった!？」

それはこちらが聞きたい。本人も、いつの間にか集まっていた野次馬も、准がいつ来たのかさえわからなかった。准の返答を誰もが待ったが、ただ蒼い髪を風になぶらせているだけだった。

「おい！聞こえねーのか！てめえ、ただじゃ済まねえか」

「帰るぞ」

「・・・え？」

「何してる。今日は保健医は休みだ。家に帰って、早く怪我の手当てをしなければ」

言うが早いか、小柄な桜子の体を小脇にかかえ、すたすたと、ゴロツキの目の前を通って校門を出ようとした。呆気にとられて危うくそのまま二人を行かせようとしてしまったゴロツキどもは、自分の失態を誤魔化すために、全員で二人を取り囲んだ。つまりフクロだ。全く誤魔化せていないどころか、二倍以上に恥ずかしいが。

「どけ」

准の言葉は簡潔である。単純明快。故に余計な言葉を挟ませない。

「なっ・・・!」

このゴロツキも何も言い返せず、言葉に詰まってしまった。他の奴らの手前、ここでひるむわけにはいかない。

「野郎・・・。てめえら、やっちまえ!!」

時代劇なみに定番の台詞をはいて、こちらは時代劇を踏襲せずに、みずからも突っ込んでいった。

一斉に、准に襲い掛かる!

准は、桜子を守りながらの、圧倒的に不利な戦いだ。全面から攻撃

されては、桜子を守りきれない。

だが。

砂塵が立ち消え、そこに立っていたのは、准と桜子であった。

「いくぞ、桜子」

何事も無かったかのように、死屍累々の中を准は正門へと歩いていった。風になぶらせるままにしている豊かな髪は、どこまでも蒼かった……。

サクラ咲くころに（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます！

これからも精進しますので、どうぞよろしくお願いいたします！

大好きの意味

「ちよつと准ちゃん！」

先ほどから呼んでいるのに、准は一向に振り返らない。それどころか、桜子のことなど気にもしていない風に、どンドン歩いて行ってしまう。准は標準よりかなり背が高く、桜子はこれまた標準よりかなり背が低いので、自然、歩幅に差が出てしまうのだ。

今までは准が桜子の歩幅に合わせてくれていたので、並んで歩けたのだ。今更ながらにそのことに気がつきながら、桜子は、准のところまで走っていった。

「・・・もう、准ちゃん、早いよ・・・」

せえせえ言いながら、それでも立ち止まって自分を待ってくれた准を嬉しく思った。

息を整えながら、准を横目で見ると、准は、前方を見ていた。何かあるのかと、桜子も准のしている方を目で追うが、特にこれといって変わったものない。

ようやく呼吸が普通に戻り、改めて准を見やると、まだ前方を見たままだ。さすがに不振に思った桜子は、

「・・・ねえ、准ちゃん」

「これが俺だ」

「え？」

何を言っているのかわからず、問い返した。

「あいつは・・・さっきの野郎どものひとりは、俺が潰したやつだ」「つぶし・・・た？」

「ああ。帰りに歩いてたらな、この髪の色に難癖つけてきたんだ。無視したんだがな。奴ら八ナからやる気だな。しかたないから返り討ちにした。今日はその、報復だ」

「それがどう」

「これが俺だ。俺の傍にいと、今日みたいなことが年中だ。それ

に、見ただろう?」

准が何を「見た」といつているのか、桜子はわかった。やつらを

ゴロツキどもを倒したとき、准は唾っていたのだ。

(弱い奴らだ)

(もっと強い敵が欲しい)

(もっと、もっと、もっと!!!)

桜子をかばいながら、准はただ、強さを求めていた。もっと強く、
なるために。

「俺に安住はない。求めもしない。だから」

「だから、『俺に近づくな』?」

「ああ、そうだ」

「いや」

「・・・は?」

ふう、と、桜子はため息をつく。キツと、真正面から准を見据えた。

「例え准ちゃんが原因だとしても。おせっかいをしたのは私なのよ。
准ちゃんは、私を守ってくれた」

「だからそれは」

「『強くなりたい』から?それでもいいの。いえ、それなら、なお
都合がいいわ。だって、そうでしょ?准ちゃんの周りには准ちゃん
をやっつけようとする人たちがいっぱい。そこへ、私が入る。する
と、私が准ちゃんの足手まといになる。そうすると准ちゃんは私を
守らなきゃいけなくなるから、戦いが不利になる。」

「お前何を」

「つ・ま・り!不利な戦いに勝つことで、准ちゃんはますます強くなる!」

「はあ?」

おいおい、まじで言ってるのか?という准の心を他所に、桜子はふ
ふんつと、得意げである。

こいつは、飽くまでも俺にくっついてくるつもりらしい。だが、そ

んな危険に晒させるわけにはいかない。

「ねえ、准ちゃん」

急に、桜子の声の調子が変わった。静かな、決意を語るかのような
声音に。准は、はっとして、桜子を見た。

「あたしね」

風に桜がそよぐ・・・。

「准ちゃんが大好き」

薄紅色の空がそよぐ。

見事なアーチを作っている花々も、今は散る時を知り、はらはらと、
風にその身をまかせていた。その中を、異色の絵の具が流れる。空
の青とも海の青とも違う、独特の蒼。自然界とは相容れない存在か
もしれない。その色はどこまでも、孤独だった。

蒼い髪をなびかせながら、准は桜のトンネルを歩いていった。

（准ちゃんが大好き）

桜子は、そう言った。どうってことない言葉だ。そこそこにあふれ
ている、誰でも、誰にでも使う言葉。気にするようなことではない。

いや、自分は気になどしていない。

そう言いながら、准には、あの時の桜子の真摯な瞳が頭から離れな
かった。

（准ちゃんが大好き）

あれ以来、桜子に会っていない。いや、出会っても、こちらから避
けてしまうのだ。

どんな顔をすればいいのか、わからない。別に、愛の告白を
されたわけではない。それは、准にもわかった。あの「大好き」に
は、愛だの恋だの、そんなものではない。ただ純粹に、准のことが
「好き」なのだ。

しかし、准は、どうしたらいいのかわからなかった。こんな風に、誰かに、特別な人間として接しられたことなど無かったのだ。だから・・・そう、どうしたらいいのかわからない。

桜子のほうは、准ちゃん准ちゃん、と、いつものように追いかけてもこない。すれ違って、准が避けると、そのまま自由にさせている。それが、また余計に、桜子にどう接したらいいのかわからず、困惑する要因なのである。

まったく、どうしたものか・・・。

その心は知らず、桜は季節はずれの雪をふらせていた。

「つつかまっえた」

「・・・おい」

「えへへへへ。ひさしぶり！」

屋上で昼飯を平らげていたところで、桜子が突然現れた。何ヶ月も会っていない気がしたが、実際には一週間も経ってないだろう。しかし今まで静観していた桜子が、ここにきていきなりどうしたのか。いや、それよりも、どういう顔をしたものか。。。

「あたしもお弁当食べていい？」

質問形だが、准の答えを聞く前に、とつとと弁当の包みを広げている。

「いったただつきまーす！」

さっさと食べ始めた。准は、呆れて見ているしかなかった。

「あれだよなー。こーいうとこでさー。大好きな友達とお弁当食べるのって、それだけで美味しいよねー」

准が聞いていると思っっているのかいないのか、勝手にひとりで喋っている。

准といえ、先ほどから居心地が悪くて仕方がない。今まで避けて

きた相手に、何事もなかったように「やあ今日もいい天気だねえ」と言えるほど、准は器用ではなかった。

「んー」。このきゅうり、おいしーい。玉子焼ききもふっくら！さすがお母さん！」

玉子焼きはともかく、きゅうりが美味しいのは、母親の手柄ではあるまい。しかし・・・

「・・・母親が、作ったのか」

ん？というふうにごちらを向き、桜子は、ニツと笑った。

「やーっと喋ってくれた」

ににごにこと、美味しそうに弁当を食べる。

「准ちゃんはずーっとあたしのこと無視するから、けっこう痛かったんだよ？」

ちつとも痛そうではないが。相変わらずにごにこと、美味しそうに食べている。

それが気になるのか、准はただ見ている。

「そうだよ。お母さんが、いつも作ってくれてるの。すごく美味しいんだよ」

さして手が込んでいるわけでもない弁当だが、桜子には、とても美味いらしい。

「そうか・・・」

准の顔に、少し翳りが生じたように見えた。

不振に思って、桜子が准を見ると、その手元には、購買で買ってきたらしい出来合いの弁当とパンがある。

そういえば、桜子が見た限り、准は自分の弁当を持ってきたことがない。親が、忙しいのだろうか？

桜子の表情を見て取ってか、

「料理が、下手なんだよ」

自分がなのか、親がなのか。その顔には、自嘲の色がつかがえた。

「ねえ、准ちゃん」

「ん？」

「あたし、作ってきてあげるよ！」

「・・・は？」

「お弁当！作ってきてあげる！！！」

「お前の母親に悪いだろ」

「あら。だれがお母さんが作るって言った？」

「え・・・？」

に「んまりと笑うと、桜子は、

「あたしが作ってあげるのよ！」

と、得意そうに言った。

「・・・ひとつ、聞くけどな・・・」

「なあに？」

「お前、料理できるんだよな？」

「まさか」

「・・・やっぱり。」

「弁当は、遠慮しとくわ」

「ええ〜〜。なんで〜〜？」

桜子の非難をよそに、准はひょいっと立ち上がると、

「じゃあな」

と言い捨てるように、屋上を後にした。

大好きの意味（後書き）

准が、次第に桜子に心惹かれていく様を書きました。
さて、これからどうなるでしょう。
お楽しみに！

帰り道

「大好き」と、言われた直後よりはましになってきた。しかし相変わらず、目を合わせて話せないのだ。

ふう、と溜め息ひとつ付くと、また窓の外を眺め始めた。

その時だ。無粋な声がかかったのは。

「余裕ですね、片桐さん」

准を目の敵にしている教師だ。准の容貌はどうしても目をひき、あまつさえ制服を無視して勝手な格好をしている。教師達から何度言われてもそのスタイルを変えず、最後には教師達のほうが折れてしまった。が、この人物だけは例外で、廊下で、教室で、出会うたびに、注意をしてくる。生活指導担当というわけではなく、とにかく准が気に入らない、ということらしい。なにかにつけ、嫌味をいつてくる。

この時も例外ではなかった。

「片桐さん。先ほどから窓ばかり見てますけど、窓ガラスが汚れているの？それとも、自分の姿に見とれているのかしら？」

准が授業をまともに聞いていないのは今に始まったことではないが、先ほどの溜め息が耳に入ったようだ。

「失礼しました」

「あら。なにが失礼なのかしら？謝るようなことがあったかしら？」
今日はことさらご機嫌が麗しくないらしい。わざわざ教壇を降りて、准の机のところに来て来た。准を叩き潰すまで引き下がらないだろう。かなり面倒だ。

「なにか言ったらどう」

「美しくて」

「え？」

准はすっと立ち上がり　そうするとその教師より背が高くなるのだが　その蒼い瞳で相手を見つめた。

「先生があまりに眩しくて、まっすぐ見ることができませんでした。それがお気に触ったのなら、謝ります。ですが・・・私を惑わせる、その美しさが罪なのです。」

「あ、あなた、なに、なにを」

「先生・・・」

ゆっくりと、顔を近づけていく。瞳を覗き込むように、徐々に・・・唇が、触れるのかというところで、すっと、すべった。耳元に、囁きかける。

教師の体が、くず折れた。ぺたんつと床に座り込んでしまった。肩が、小刻みに揺れている。頬が紅潮しているのは、気のせいではあるまい。

准が何を言ったのやら、教師はどうやら再起不能。両脇を支えられて、どうにか保健室へと連れられていった。

薫風の中、准は歩いていった。青空の下の桜吹雪に、誰もが心浮き立たせていたが、准だけは少なくとも例外だった。昼に桜子が現れて、あのひまわりのような笑顔を久しぶりに見せられ、少しこころの尖がりやが和らいだが、それでも何とはなしに苛立って、教師にぶつけてしまった。あの後、教師がどうなったかはどうでもいいが、いつまでも不機嫌でいるのも本意ではなかった。

あいつは、お前にとって、何だ？

もう幾度も繰り返しているこの問いに、答える者もなかった。あいつはお前にとって

「うりゃあつー!!」

ドンツと背中へ衝撃を受け、准は危うく転倒しそうになった。何事かと振り向けば、ひまわりのようなその笑顔。

「・・・全力でぶつかりやがって・・・」

「あははははははは！！」

「楽しくねえつつ！！」

「だって、准ちゃんつたら、ぼーっとしちゃって、ゼーんぜん気が付かないんだもん。何かしたくなるでしょ？」

「どういう思考だ」

「まーまー。とりあえず、帰りましょ」

結局、一緒に帰ることになった。

校門から続くこの桜並木は、ふたりの上にも、花を散らせた。

桜子の歩調に合わせて、准はゆっくりと歩いた。桜子が何か喋っているが、今の准には気に留める余裕はなかった。答えの出ない問いを繰り返しながら、桜色のトンネルを黙々と歩いていた。

ふいに、「さくらこ」という単語が聞こえた。少し離れたところを、男子学生が数人歩いていった。

「なんだよお前、気があるのかよ？」

「やめるよ、冗談にならないぜ」

「ははっ。まあな。あいつと付き合うくらいなら、ババアのがマシだっつて」

「おいおい、ババアに失礼だろ」

「うわっ、ひでえ」

「でもマジな話、あいつ女に見えねえもんな」

「そりゃ、女じゃないもんな」

「おこちゃまだよ、おこちゃま」

「へえ、お前、ロリなんだ」

「だからなんで俺なんだよ！」

「あつ。怒ったぜ、こいつ。図星かよ」

「やめるよ」

「桜子ちゃん。こいつが夢中でちゅ〜」

「ふざけんなっ」

ひとりの男子を、みなでからかっている。ほかの奴らは、げらげら笑っている。

風が、吹いた。

それと共に、今までそこにいたはずの朋友のひとりが、消えた。また、風が吹いた。ひとり、消えた。

また、風が……。

一陣の風が吹くたびに、ひとり消えていく。残された者たちは、何が起こっているのかわからないようだ。

風は、空の色に似ていた。

振り向くと、そこには人間が立っていた。髪も瞳も、ありえない蒼。空の色に、似ていたろうか。

「か、かた……ぎり」

ひとりが、呟いた。挨拶のつもりだったのかもしれない。なんとも場違いだが。

准は、この学校では有名だ。むろん、その容姿のせいで。髪は染めたような蒼。切れ長の瞳に宿る静謐もまた、同じ色をしている。

だが、それだけなら、名前までは覚えられなかっただろう。その理由は、今の准が証明している。

いつもは静かなその瞳に。蒼い炎を灯して。風に髪をなぶらせたまま、立っていた。何に似ていたろう。仁王のように無骨でなく。般若のようにギラつくでもない。静かに。ただ静かに、張り詰めた緊張と、蒼い炎がそこにあった。

「なあ、片桐。お前さあ、一般生徒には、手、出さないって……」
そう。今まで、准はこの学校の生徒には手を出したことがなかった。

カタギを相手に暴力を振るうほど、准は弱くなかった。だが

「俺がいつ、そんなことを言った？」

「!?!」

その生徒は、声にならない悲鳴をあげた。

准はゆっくりとそいつに近づいていった。

「ひっ！」

わけがわからず、ただ次は自分の番だと、怯えている。

「な、なんだよ片桐！俺が何かしたのかよ!?!」

「自分に聞け」

「あ……。桜子か!? あいつを
びゅつと蒼い風が舞い、そいつは吹っ飛んだ。准はそれに冷ややかな一瞥をあたえ、

「気安く呼ぶな」

吐き捨てるように言うと、最後のひとりに向き直った。そいつはもう、プライドもなにもあったものではなく、腰を抜かして、がたがた震えていた。

こいつは放っておいてもいいだろう。そう判断すると、准は桜子のもとへと帰っていった。

桜子は、こちらを向いていた。だがその顔に、ひまわりの明るさはなかった。男子生徒たちの会話を、桜子もまた、聞いていたのだ。

准は傍により、

「気にするな。馬鹿の言うことだ」

「……。え? あ、やだなー准ちゃん。あたし、気になんかしてないよ」

無理に明るく言った言葉は、震えていた。さらに准が何か言おうとした時。

「は! 白々しいんだよ! てめえを相手にする男なんざいねえよ、ブス!」

「あ……」

桜子のこらえていた笑顔が凍りついた。

青い旋風が舞う。

「うっ……!」

声にならない苦鳴をあげたのは、腰を抜かしていた奴だ。自分だけはやられないとでも思っていたのだろう。

だが

こいつだけは、吹き飛ばなかった。足が、空を蹴っている。

「あ……が……」

苦鳴は、少し上から聞こえた。木に、背中へばり付いている。木

に、縫いとめられているのだ。

縫いとめているのは、准の足だった。その足に、さらに力を込める。その生徒は、呼吸ができず、顔の色が白く変色してきている。だが、准はさらに力を込めた。もう、窒息してしまう。酸素を求めてぱくぱくしていた口が、動かなくなつた。首が、だらんと垂れる。それでも、准は足を離さなかつた。それどころか、ますます力を入れる。「准ちゃんっ、もうやめて!!」

桜子の声がした途端、その生徒は自由になつた。その髪をわしづかみ、自分の顔の前まで持ち上げると、

「自分のツラ見てからいいやがれ」

手を離れた。重力に従い、その生徒は地面に落下した。息をしているのかどうか定かでないが、そんなことを気にする様子もなく、准は桜子の傍に歩み寄つた。

「桜子」

「大丈夫、平気だよ！」

「無理をするな」

「平気だつてば。馴れてるもん。それに・・・」

最後のほうは、消え入りそうに、下を向いた。

「・・・本当の、ことだもん」

下を向いたまま、つぶやく。准は、じつと、桜子を見つめていた。

「それにさ!!」

ぱつと顔をあげると、桜子は、

「その通りじゃん。あたし、精神年齢低いし、莫迦だし。男子からみたら、あたし、女子に入らないよ」

笑顔だが、必死になにかを堪えている。傷つかないわけがない。いくら馴れても、傷つかないはずがないのだ。その無理やりな笑顔を、准は何も言わず見ていたが、ふと、わきに目を逸らした。

花散らす木々の足元には、よく手入れされた芝が植わっている。薄紅の空に目を奪われた者にはひときわ目に青い。その中にひとつ、可憐な花を見つけた。芝から花開いたと見えたそれは、しかし確か

に、桜の花で。誰か手折ったのか、それとも自然に落ちたのか。それは小枝ごと、花開いていた。

緑の海からそれを拾うと、准は、桜子の髪に挿した。ちょうど、髪飾りのように。無理な笑顔を向けていた桜子は、驚いて准を見上げた。准の端正な顔が、薄紅を背景に、溶け込むまいとするかのような蒼の影になっていた。しばらくそのまま、桜子と准は瞳をあわせていた。自分たちの他には誰もいない。少なくともふたりの世界には。

「よく似合う」

数分だったのか数秒だったのか。桜子の耳には、少し低めの落ち着いた声が届いた。

「え？」

何のことかわからず、聞くとはなしに問い返す。

「桜だ。お前には、よく似合う」

そう言うと、初めて見る顔で、准は笑った。

蒼い海の真ん中で。微笑んだのは誰なのか。どんな宝石よりも。世界中の美男よりも。桜子は今日の前にいる人を、美しいと思った。

桜子の視界が蒼に染まる。

気がつけば准は背を見せ、歩き出していた。桜の吹雪の中、蒼く蒼く、その姿は浮き立っていた。

ああ、そうか……。そうだったのだ。

准は、歩きながら思っていた。

桜子、俺は……。

薄紅の花弁が頬をうつ。

桜子、俺はお前を……

晴天よりも蒼い髪を、風にまかせて。

「桜子、俺もお前が『大好き』だ」
微笑を浮かべながら、ひとり、呟いた。

迷惑な昼下がり

晴天の昼下がり。准はいつものように、屋上で寝転がっていた。いつもより、空がきれいな気がした。

「准ちゃん！」

待ち人来たれり。

「おう」

簡潔な返事をして身を起こすと、桜子のほうを向いた。いつもならかけよってくる桜子だが、この日はそうはいかなかった。荷物が、こつたのだ。やけにはかでかい何かを風呂敷に包んで両手で下げて持っていた。重そうで、一步一步歩くので精一杯のようだ。息が、あがっている。

「・・・なんだこれは」

いつの間にやら傍に来ていた准が、ひょいとその荷物を片手で取り上げる。

「・・・お、おべんと・・・う」

ぜいぜい言いながら、桜子はそう答えた。

「何人分あるんだよ」

「だって、准ちゃん、どのくらい食べるのかわからなくて」

ふう、と息をつくくと、桜子はその場に座り込んだ。

「ね、食べて！」

「ん？ああ」

准もその場に座ると、風呂敷を広げる。男子用の大きな弁当箱が、四つも入っている。ひとつにはご飯、ふたつにはおかず、最後のひとつはデザート。よくもまあ、これだけ持って来たものだ。家から学校まで持つてくるだけでも、桜子の体格では大変だろう。

「お前が、作ったのか？」

「そう！・・・って言いたいとこだけど、お母さんに手伝ってもらっちゃった」

へへ、と笑う。

准は、無言で食べ始めた。瞬く間に、食材が消えていく。きちんと噛んで食べているのだが、次々口の中に入っていく。あっという間に、全て食べ終えてしまった。

「ごちそうさま」

手を合わせてそう言うと、准は箸を置いた。

桜子といえば、満足そうに、准を見ている。

全部食べてくれたということは、美味しかったということだ。

准の場合は。

さつさと弁当を片付け、風呂敷に包みなおす。見事な、包み方だった。手馴れたその手つきに、桜子は見とれていた。

「准ちゃんって、変わってるよね」

「なんだ？今更」

准が普通と違うのは、見た目からしてわかりきったことだ。

「なんかさー、タバコ吸わないし、お酒飲まないし、カツアゲしないし。不良じゃないみたい」

「・・・誰が不良だったよ」

「それにさー」

桜子がかまわず続ける。

「言葉遣いも格好も、男子みたいだよな」

「・・・それがどうした」

「だって、准ちゃん、女の子なんだよ」

今更何を言い出すのか。自分が女だということなど、准は嫌というほどわかっている。それでもあえて、この格好なのだ。

「俺にとっては、これが普通なんだ。だからやってる。それだけだ」

「『俺』じゃなくて『私』でしょ！」

「はあ!？」

「いい？今日からは、『俺』は禁止！『私』っていうのよ！わかった!？」

桜子の剣幕に押されて、准はこくこくとうなずいていた。。。

迷惑な昼下がり（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます！
突然、桜子が変わることを言い出しました。
さて。

続きをお楽しみに！

桜子の異変

「まったく、なんなんだ、あいつは」

最近めつきり独り言が多くなった准が、ひとりごちた。

「ほかの奴らじゃあるまいに」

今まで桜子は、一度だって准の容姿や言動にけちをつけたことなどなかった。気にすることもなかった。だからこそ、准も傍にいさせていた。なのに今日に限ってなんでいきなり……。どんつ。

「あ。わりい」

知らずぼーっとして、誰かにぶつかったらしい。相手は弾き飛ばされて、床にしりもちをついていた。

「あ、いいえ、こちらこそ……」

ぶつかった相手が准だと気がついて、あわてて起き上がる。

「怪我、なかったか？」

准とぶつかると思ひ、相手が怪我をする。

「あ、はい、大丈夫です」

こころなしか頬を紅く染めて、女生徒はうなずいた。

そういえば、この生徒……。

「あんだ、桜子と同じクラスだったよな？」

「え、あ、はい」

何か、知っているかもしれない。最近、桜子に変わったことはあったのか。なにか、気がついたことはあるか。

「えっと……いえ、べつに、ないと思います」

ほっとしたような、落胆したような。

「そうか。ありがとう」

准は、その場を立ち去った。

女生徒はそれを見送り

というより見とれて

それから

歩き出そうとして、

「……そういえば、なんだか最近、ぼーっとしてたりするけど……ま、たいしたことじゃないわよね」

その日は勉強に身が入らなかった。身が入ったことなどないが。今日はこれで授業は終わりだから、とっつかまえて本人に聞いてみよう。

「おい、片桐！ 今言ったところを
教師はそれ以上言えなかった。」

「くにやぶれてさんがありしろはるにしてそうもくふかしときにかんじてはなにもなみだをこぼしわかれをうらみてはとりにもこころをおどるかすほつかさんげつにつらなりかしよばんきんにあたるはくとうかけばさらにみじかくすべてかんざしにたえざらんとす」
立て板に水。杜甫の漢詩『春望』くらい、一度読んで暗記している。なんの抑揚もつけずに最後まですらすら答えて、准はまた、窓の外を眺めた。教科書にあることは、すでに全部頭にいれてしまっている。だから、授業を受ける必要がない。それ以上のことは、勝手に自分で調べてしまう。下手をすると、教師より、知識があるだろう。だが、白楽天の『長恨歌』を丸暗記している、と自慢する教師と、つまらない張り合いをするつもりもなかった。教師は面目を潰されて怒りでふるえていたが、そんなことは、今の准にはどうでもよかった。

授業が終わったら、聞いてみよう。
それだけだった。

桜子の異変（後書き）

桜子の異変に、准が気がついた。
そう、問いただせばいいことなのだが。。。

きつと、些細なこと

やけに長く感じた放課後が終わり、やっと桜子に会えた。しかし桜子は珍しく、機嫌が悪かった。

桜子の姿を見つけて声をかけようとした准をきつと睨むと、

「あの女、誰？」

准にはなんのことだかさっぱりわからない。

なんなんだ？今日はなんだか

「お前、変だぞ。どうかしたのか？」

「誰って、聞いているの」

さすがにむっとして、

「俺が誰と会おうと俺の勝手だ」

と、つつばなした。

「『俺』じゃない、『私』でしょ」

「だからなんで」

じつとこちらを睨み据える桜子に、それ以上言えなかった。

はあ、と溜め息をひとつつくと、

「私が誰と会おうと、私の勝手だ。これでいいか？」

「あの女は誰？」

「だから、あの女って、だれだよ」

「とぼけないで。廊下で、女と話してたじゃない」

ああ。授業の前に、廊下でぶつかった女子生徒のことか。一言二言話したが、それがなんだというのか。しかも、「あの女」よばわりとは……。桜子らしくない。

「あの女子に、お前のことを聞いていたんだ。最近のお前に、何か変わったことはないかってな。今日のお前、おかしいぞ」

准は咎めたが、桜子は

「そう……。それだけ……」

上の空で、何かひとりり納得している。

「おい、桜子？」

見かねて准が声をかけると、

「え？」

「『え？』じゃねえよ。どうしたんだよ」

「ああ、なんでもないわ。それより准、帰りましょう」

今、何と言った？

『准』

たしかに今、桜子はそう言った。『准ちゃん』ではなく、『准』と。たったそれだけのことで、准は総毛だった。

ついてこない准をいぶかしんで、桜子は振り返った。

「准？」

金縛りにあったように、動かない。冷や汗が、こめかみを伝う。気がついたかのように、桜子が笑う。

「ごめん！ 帰ろ、准ちゃん！」

いつもの、桜子だ。

些細なことだ。きっと、今日は特別に機嫌が悪かっただけのことだ。そう、それだけのこと。気にする必要なんか無い。明日になれば、桜子はいつもの笑顔で、「准ちゃん！」と笑顔でかけてくる。そう、きっとそうだ。

みぞおちに渦巻いたどす黒い不安を打ち消すように、准は心の中でそう繰り返していた。

制服

「准ちゃん!」

朝っぱらから元気に、声をかけてきたのは、無論桜子である。何が楽しいのか、いつもながらにこにこと笑っている。

そう、いつもどおり。

安堵しながらも、何がしかの不安を准は打ち払えずにいた。

「おっはよー! 今日もいい天気!」

そんな准の心を知ってか知らずか、桜子は明るく笑う。准はふと、桜子の手元に目をやる。重そうな風呂敷は、准の今日の弁当だろう。それを持つ手に、目があった。あちこち、すりむけたり切れたり、傷だらけだ。絆創膏もはっていない。慣れない料理をしているせいで、生傷が絶えないのだろう。

准は、風呂敷包みをとりあげた。

「ありがとう」

にこにこしながら、桜子は礼を言う。

「准ちゃん、いつもおべんと全部食べてくれるよねー。美味しいですよ? お母さんがほとんど作ってるから」

「ああ。美味しいな」

「あたしの作ったのって、すぐわかるでしょ? 下手だから」

「ああ、下手だな」

「・・・へへへ。そう・・・だよね」

「だが、私はお前が作った方が食べたい」

「え?」

驚いたように准を見上げると、瞳を震わせ、下を向いてしまった。

「どうした? 桜子」

どんと背中を衝撃を受けた。桜子の両手が准の背中に向かって伸ばされている。

「おい、なにす」
「んもう、准ちゃんたら！ かつこ良すぎー」
「そういうと、桜子は、准を置いて、
「あたし、先行ってるね！」
と、かけていってしまった。
「・・・なんだあいつ」
置いてけぼりを食った格好になった准は、そうひとりごちた。

帰り、いつも通り一緒に帰る准と桜子だった。たわいないおしゃべりを ほとんど喋るのは桜子だったが しながら歩いていたが、ふと、桜子が言った。
「准ちゃん、制服着てみたら？」
「あ？学ランならもう着たる」
「じゃなくて、女子の制服！」
「お、俺に女装しろってのかよ！」
「『俺』じゃなくて『私』！それに女装じゃなくて普通の格好でしよ！」
「俺・・・私はスカートなんざ穿いたことないぞ」
「穿いてみたらいいじゃん」
「なんで私がそんな気色悪いことしなきゃなんねーんだよ」
「やなら、明日から、お弁当抜きね」
「う・・・」
結構、痛いところを突かれた。桜子の持つてくる弁当は美味い。ほとんどは母親が作っているというが、最近は桜子がかかり手をかけてくれているのがわかる。それを無下扱い、桜子を傷つけるのは嫌だった。しかし女装は。。。
「女装じゃないからね」

「う」

はあ、と溜め息をひとつつくくと、

「わかった……。制服を着てくる……。」「

あきらめたように、答えた。

反応

翌日の登校時間は騒がしかった。ひとりの女生徒が、颯爽と正門から入って来たのだ。

それだけならいつもと同じだが、その女生徒は、蒼い髪と瞳をしていた。豊かな髪をなびかせ、少し短めのスカートから長い足が伸び、さっさと歩く様は、いっそ中性的な魅力を伴った。

「おい、あれ、片桐だろ？」

「他にだれだつてんだよ」

「だって、スカートだぜ」

「でもよう……」

「ああ……」

「いい女……だよな」

はあ、と准はこの日何度目かの溜め息をついた。物珍しいのはわかるが、こつもじろじろ見られるのは、なんとも嫌だった。女装しているだけでも恥以外の何物でもないのに。廊下を歩いていると、桜子が見えた。

「おい、桜子！」

文句を言ってやろうと、声をかける。近づいてきた桜子の顔は、何故か暗かった。それなのに、頬は紅潮し、瞳は潤んでいた。准を見てにこつと笑うと、

「似合うね、准ちゃん」

「似合うか！」

准としてはこの女装を一刻も早く解きたい。

「これで、約束は果たしたからな。脱ぐぞ」

「どこで？」

「違うわ！」

「だーめ。今日いちにち、その格好で過ごすの」

「今日……いちにち？」

絶望的な気分で、准はつぶやいた……。

視線が気になる。いつものタンクトップならば、どう見られようが関係ない。あれが自分の姿だ。しかし。。。

「なんだこら」

至近距離からじろじろ見ている奴に、軽く一瞥をくれる。慌てたようにその生徒は前を向いた。他の生徒数人もそれにならった。ここは教室。いつもの格好には慣れているクラスメイトたちにとって、今日の准の格好はちょっとしたカルチャーショックだ。皆、授業に身が入らず、そわそわと准のほうを見たりしている。

まったく。なんで俺が。

当の准は、勿論授業は適当に聞きながら、いい加減うるさくなってきた視線をやり過ごすかのように窓の外を見た。その姿が余計に視線を集めるとも知らず。

窓枠に肘をつき、少し気だるげに外を見る。いつもは襟で隠れているうなじに少し髪がかかり、せなへと流れる。短めのスカートからは両足がのぞき、長い足が組まれている。制服はきっちりときこなし、清潔感がある分、かえって艶がある。

それを男が放っておくはずもなく。首筋やら足やらをしきりと気にしている。ところが、女生徒までが頬をそめて見ている。見慣れないせいか、それともアンバランスなせいか、錯綜的な色気が出ているらしい。男装の麗人ならぬ、女装の麗人。准も罪な存在である。

しかしながら本人にとってそんなことはどうでもよく、今すぐに

でも着替えてしまいたいが、これも弁当のため、と、我慢し続けていた……。

リップ

昼食の鐘が鳴り、准は一目散に屋上へとかけあがる。待望の昼食にありつくためと、桜子に文句を言うためだ。屋上の扉を勢いよく開けると、桜子の姿を探したが、見つからなかった。それも道理。准が走ってきたのだから、桜子が追い越せるわけがない。目標を見失って、准は仕方なく、待つことにした。

屋上からの眺めは、窓際から見るとはまた違って、いい。見えるのは下界と空ばかり。

何者からも束縛されない。学校という息苦しい牢から、一時でも解放された気分になる。手すりにもたれ、何を見るときもなく見ていた。「准ちゃんが大好き」

ふいに、思い出す。それと同時に、桜子を守って戦ったことも。准は、強くなりたかった。誰からも守られる必要がないくらい。誰かを守るくらい。そのために、より強い相手と戦いたかった。自分が女であることを、忘れたかった。男になりたかったわけではない。女でありたくなかったのだ。幼子からの成長の段階で、准はまず、女の側に近づいた。それは母という存在によって拒絶された。次に、男の側に行ってみた。こちらなら、生きられるかもしれない。そのわずかな思いは、兄の存在で絶望的に打ち砕かれた。准は、寄る辺を失った。その結果が、男でも女でもないものになりたい、という、不可思議な望みとなった。准は今、自分がいかに女であるかを承知していた。だからこそ、「女」の部分を削ぎ落としてしまいたかった。准の言動も格好も、それを根本とするからこそ、「学校」ひいては「社会」という枠組みから外れていた。そのことで周りからどう扱われようと、そんなことはどうでもよかった。他人の評価を気にしすぎるほど気にしていた時代は、もう、過去のことだ。だが

「准ちゃん、おべんと食べよう」

本人のとろさをうかがわせる声音で、准を昼食に誘う。

「あ。准ちゃん、偉い偉い。ちゃんとして制服でいるんだ」

「お前が弁当抜きにするって脅したんだろっが」

「あれ？そーだったっけ？」

「……」

これ以上何も言う気にならず、その場に腰をおろした。

そう。この桜子だけが例外だった。弁当という質はとられて
いるにせよ、そうやすやすと准が人の言うことに従うはずもなく。
しかしこの桜子にだけは、逆らえない。

いや。逆らいたくないのかもしれない。この少女に出会って、
准は人と関わることの楽しさを学んだ。そしてこの少女を愛しく思
うと、我侭さえ享受してしまう。准にとって桜子は、荒んでとがっ
ている心を一瞬にしてまるく溶かしてしまう、不思議な存在だった。
その存在に目を向ける。ふと、あることに気がついた。今まで気
がつかなかったのがおかしいくらい、それは歴然とした違いで。お
そらく、准が自分の制服姿にばかり意識を注いでいたからだろう。
准は気がつかなかった。桜子の容貌が、少しばかり違っていただけに。

「桜子、その髪……」

いつもは頭の両脇に髪ゴム縛ってあったのが、今は下ろしてある。
そうすると肩のあたりまで髪がかかって、少し大人っぽく見える。
そしてもうひとつ。唇が、やけに紅かった。艶まで出ていて、幼い
顔にひどく似合わなかった。

「あ、気がついた？お昼になってから、ここに来る前に、まっすぐ
にしたの。どう？似合う？」

「似合わないな」

「え？」

「それに、なんだ、その気色悪い唇は」

「これ？えへへ、ちよっとね、お姉ちゃんに借りて、付けてみたの。
口紅と、グロス。ちよっと、お洒落してみたの」

准は、何故か強い不快を感じた。自分の変化に喜んでいる桜子に、

嫌悪さえ感じた。

「…………今すぐやめろ」

「は？」

「聞こえなかったか。やめろ、と言ったんだ」

「え…………。だって…………」

「髪もいつも通り両脇にくくれ。そのほうが、似合ってる」

「…………リップ、きれいじゃない？」

「そんな商売女みたいなこと、お前がしなくていい」

准に、喜んでもらえると思った。「きれいだ」と言ってくれるかも、と。だが准からすると、ただの墮落だったのだ。

「うん、私は私でいいのよ。子供っぽいのが私…………」

そう言いながら、桜子の顔は暗かった。

なんなのだ、あれは。

帰り道、准は昼間のことを思い出していた。口紅を赤く塗りたくって、髪を下ろして。あんな桜子を見るのは、気色悪い。あれではまるで、女ではないか。あいつはまだ少女。あんなのは似合わない。髪を両脇に結って、かわいい髪飾りをつけて。

女と、すれ違った。顔を塗りたくって、露出度の高い服を着ている。髪はだらしなくウェーブを描いて垂れ下がり、すれ違っただけで整髪料の匂いがする。

それを苦い思いで見やりながら、准は思う。

桜子、お前は、こんな風になりたいのか？お前はこんな今時分の女

どもとは違うのだ。清純、潔白。どこかあどけなく、子供のような。どこまでも無垢で、清らかで、一点の穢れも無く。そうだ、桜子、それがお前だ。変わる必要なんか無い。桜子、おまえはそのままがいい。

女

桜の花も散り終わり、足元にさえ欠片もなく掃かれ、木々は緑一色に塗りこめられた。

青々とした空気が満ち、爽やかな香りが鼻腔をくすぐる。華やいだ春は去り、しかし太陽はこれから起こる多少のいたずらは多めに見そう。そんな予感に、人々は少し浮かれ気味であった。准も、そのひとり。桜子に出会ったばかりの頃は、まだ空気は冷たくて。かさつく木肌を背をもたせ掛けた准は、周りの空気よりも、その木肌よりも、ささくれ、冷たかった。桜の季節を過ぎ、准の心には、小さな花が咲いていた。それはひまわりのような笑顔の桜。小さな小さな、けれども大きな存在。冷え切っていた准のところに、暖かな風を運んだ。

他の連中から見てもそれはわかるらしく、准をとりまく者たちも、態度を知らず変えていた。今も、また。

「片桐さん、おはよう」

少し控えめに話しかけてくる少女。

「ああ。おはよう」

それに少し笑んで返す。話しかけてもかまわない、という雰囲気、今の准にはあった。ので。

「今日は、制服じゃないのね」

思い切つて会話をこころみる少女。その勇氣に幸運の女神が敬意を表した。

「ああ。あれじゃ、自分が気色悪くてな」

苦笑気味に、准は答える。嬉しくなつて、少女は会話を続ける。

「でも、制服、似合つてたわよ。男子にも、好評だったみたい」

「余計に気色悪いな」

ふたりで笑いあう。

「あら、麻里子、ずるいわよ」

「ひとりだけ抜け駆け！」

「そーだ、そーだ！」

わいのわいのとかしましくなってきた。どうしたわけが、准は女にもてる。まあ、自分の中の「女」を排除しているのだから、不思議ではないが。当初から女子どもは准に目を
中には想いを

寄せていたが、話しかける隙もきっかけもつかめず、溜め息をつく毎日だったのだ。それが氷が溶けるように壁がなくなり、この浮かれた季節に乗じて、みな准に話しかける。

「片桐さん、おはよ！あたし、百合」

「ファーストネーム？ずーずーしーぞ」

「そーだそーだ！」

「片桐さんだつて、まず苗字知りたいよね？」

視線が准に向けられる。准は彼女たちのかしこしいやりとりを微笑ましげに眺めていたが、

「そうだな。私は、苗字のほつが、呼びやすい。斉藤、今村、高木、相田」

全員名前を言い当てられて、驚いた。准は、ろくに授業も受けてないし、昼休みは屋上に行つてしまう。クラスメイトの名前と顔なぞ、憶えていないと誰もが思つていた。だが、准はちゃんと憶えていた。そこここで交わされる会話や、授業で教師に指される時などに。

嬉しさのあまりか、彼女らの頬は一樣に紅潮していた。緑の風の元、彼女たちは確かに青い季節を過ごしていた。

その時。

体に衝撃を受け、少女たちは悲鳴をあげた。

「じゅーんーちゃん！」

何事かと衝撃のあつた方を見やると、自分たちよりやや低い位置に小柄な少女がいた。よく見るまでもなく、准の腕にしっかりとしがみついている。

「ちよつと、なによ、あんた」

「いったー。謝んなさいよ」

もろもろの抗議を無視して、その少女は准に話しかける。当然、見上げる格好だ。

「准ちゃん、早くいこー！遅刻しちゃうよ」

「おい、桜子……」

突然体当たりをかけてきて准の隣を奪った桜子は、しゃあしゃあと言った。

当然周りは、穏やかでない。

「ちよつと、あんたいつたいな」

つかまればかけた肩を振り払い、准の腕をひっぱって連れて行ってしまった。

「なによ、あれ……」

少女たちは毒気を抜かれ、見送っていた。

「おい、もういいだろ」

いつまでも准の腕を引っ張り続ける桜子に、抗議の声をあげる。桜子は言われたとおりに腕を放したが、こちらに背を向けたままだ。

「つたく、なんだよいきなり」

「あなたこそなによ」

「は？」

桜子は背を向けたままわけのわからないことを言う。

「私になにかしたか？」

「今まであんな女たちと喋ったりしなかったじゃない。それをあんなに嬉しそうに。あの女たちもそうよ！准にべたべたしちゃうって。

下心、見え見えなのよ！ああ、いやだ！」

准は眉根を寄せ、相変わらず背を向けたままの桜子を見やる。

「……お前らしくないな。表面だけをとらえて人を批判するなんて」
桜子は、怒りからか、こぶしを握って震えている。

「そうだな。最初から偏見も持たずに接してくれてたお前からしたら、いきなり他の奴と私が仲良くしてたら、不愉快だよな」
准はふと笑う。

「なんだ、嫉妬してたのか？心配しなくても、私にとって一番は、お前だ」

桜子の、震えがとまった。

「あたしが……一番？」

「そ、一番」

笑いながら、桜子の頭をくしゃりと撫でる。

ゆっくりと、本当にゆっくりと、桜子は振り向いた。面は、伏せたまま。はるかに背の高い准からは、桜子の表情はうかがい知れない。

「なんだ、そんなこと気にしてたのか。お前、まだまだ子供」

桜子が、もたれかかっていた。もたれかかっていた？いや、違う。

そつと両手を准の体に這わせ、ほぼ全身を押し付ける。それは、子供の仕草などではなかった。すつと離れると、桜子は、何も言わずにその場を去った。准は突っ立ったまま、それを追うことも、声をかけることもできなかった。

奇立ち

「片桐さん」

外を見れば緑が目にも痛い。

「片桐さんつてば!」

「……あ? なにか言ったか?」

はあ、と溜め息をつき、少女は指差した。その方向には

「いい度胸だなあ、片桐」

白楽天をそらで言えるのが唯一の自慢の教師だ。

「『春秋』が言えたくらいでいい気になるな。あれくらい、誰だっ

て覚えられるんだ。俺は、『長恨歌』を」

「それがどうしたんですか?」

教室が水を打ったように静まり返った。いや、さきほどからこれ以上なくらい静かだったのだが、さらにその静寂が深まり、緊張している。

「なん……だと?」

「だから、『長恨歌』が全部暗唱できて、それがどうしたんですかと聞いているんです」

どうしたことが。今日の准はことさら機嫌が悪い。

教師は、言葉につまった。それがどうしたと聞かれてしまえば、自慢話など終わりだ。

「『長恨歌』が言えれば出世でもできるんですか? その割りに、先生が校長になるという話は寡聞にして存じませんが。それとも、それをどこかで発表して、偉い人に認められましたか。それはおめでとうございます」

教師は真つ青になって、ぶるぶると震えている。まずい。

「貴様あ! 授業が終わるまで、そこで立っている!」

ああ、きれた。おとなしくしていればいいものを。

「なぜですか?」

まだ反抗するつもりか。今日の准はやたらといらついている。

「無論、授業放棄、それに、教師を侮辱した罰だ！」

「授業なら聞いていましたよ。なんでも質問してください。それに、先生を侮辱したつもりはありませんし、侮辱したからなんで私が立つんです？」

「く……ぬ……この……」

教室中が息を呑む。何もそこまで怒らせなくても。

すると、突然准が立ち上がった。

「な、なんだ！この私に暴力を振るうとどうなるか」

「すみませんでした」

「……は？」

「先生のおっしゃるとおりです。先生を侮辱しました。授業が終わるまでここで立っています」

どうしたのか。今まで反抗するだけだと思っただけなら、急におとなしくなってしまった。准以外のものには、皆目見当もつかない。その言葉どおり、准は授業が終わるまでその場で立っていた。

今日は初夏も迫ろうとしているのに、肌寒かった。そんな中でも、准は相変わらず黒いタンクトップだった。空にも海にも染まらない髪をなびかせながら、准は屋上にいた。次の授業は、さぼるつもりだ。どうせ身が入らない。教師に、迷惑をかけるのは、本望でない。今や教職にあるものは、ありとあらゆる迫害を受けている。「税金で食っている」「奉仕の精神を持ってすべき」などという父兄や民間の勝手な言い分につぶされ。現実には、教師に自由はなく、父兄の言うことに反抗は許されず、やらなければならないくだけない書類ばかりが増え、生徒に関わる時間を割かれているにも関わらず、父兄からはもっと生徒に気を配るべきとのしられる。給料は税金

から出ているという意味不明な言動により、どんどん削減され、生活もはやできなくなってきた。その中で、まともな教師を望む方が間違っているのだ。
准がやったのは、ただの八つ当たりだ。それを自覚し、そしてその虚しさから、反抗をやめた。

准の母親は、准を妊娠したときから准を疎んじた。男の子が、欲しかったのだ。ゆえに、准の兄に愛情を注いだ。「兄に准じる」の意で、准の名前は付けられた。准は男の格好をさせられ、「僕」という一人称で自分を呼んだ。父親はそれを黙認し、妻のするがままにさせていた。准の唯一の味方は、兄だった。准は幼いころはひ弱で、毎日いじめられていた。そしてそのボスは、女だった。母親から徹底して無視され、女子にひどいいじめをくらい、准は「女」を疎んじた。「女」である自分をも。そこで「男」のほうへと行こうとした准は、兄という、完璧な「男」の前で、挫折を余儀なくされた。そして、今。男にも女にもなれなかった准は、その髪の色に似て、孤独だった。しかし准は紛れも無い「女」だ。それゆえに、「女」を憎んだ。「女」である自分を憎んだ。だから、体を極限までしほり、鍛え上げ、男の格好をしている。それほどに、准は己を否定した。己を。女を。だからこそ、「女」の要素の少ない桜子という存在に固執した。いや、惹かれた。なのに。それなのに。
准は、顔をあげた。

桜子。お前はどんな答えを求めている？

「今日、放課後会いたい」

准はそう、用件を告げた。桜子はいつものどおりの態度で接していたが、准にはもう、その心のうちにはわからない。いつから歯車は来る
— 出していたのか。それすらわからなかった。

「わかったわ。ちゃんと待っててよ、准ちゃん」

ひまわりのような笑顔でそういうと、教室の中に戻っていった。

桜子はぎょくに

風が心地よかった。世はなべてこともなし。そんな風にいいたげに。いつそのまま桜子が来なければ。なにこともなかったように振舞って。以前のように二人で笑って。

しかしそれができないことは、准自身がよくわかっていた。准はもう、気がついてしまった。後戻りは、できない。知らないふりをして、准のころにも桜子の心にも溝ができるばかり。虚構の思い出をつくっても、なににもならない。

風は、ひとりの少女を運んできた。

「桜子」

小さな影は答えた。

「はい、桜子です！ 准ちゃん、用事ってなーに？」

准は何から話したのか迷った。聞きたいことはただひとつ。だが、聞きたくないこともただひとつ。

「……なあ、桜子」

「うん。なあに？」

「私は、なにを間違えてしまったんだ？」

「え？」

意味がわからないという風に、小首をかしげる。その姿は、まだ本当に、幼い少女のもので。両脇に結わえた髪が愛らしく似合った。

「いつから、お前は変わっていた？ なぜ変わってしまった？」

「准ちゃん、どうしたの？ 意味わかんないよ」

「初めて出会ったとき、私はお前をひまわりのような少女だと思った。誰よりも明るく、正義感が強くて、そんな小さな体で精一杯生きていて」

「昔話かしたいの？」

「だが、今、私はお前がわからない。お前は何を考えている？ いや、何を求めている？」

「准ちゃん、話がよく」

「いい加減にしる！ もう芝居はいい！ あの 俺の桜子はどこにいる……？」

振り絞るような声音だった。救いを求めるような。風が季節の変わり目を伝えていた……。

どれくらいたったのか。時間の感覚さえ、失っていた。やがて、小さな影が呟いた。

「准ちゃん。あたしね、最初に准ちゃんに会ったときから、准ちゃんが好きだった。こんな不良は、あたしが友達になってあげなきゃって思った。」

准ちゃん、ほんとに綺麗で。ほんとにかっこよくて。大好きだった。このままいられたら、きつと幸せだった。

けどね。駄目だったの。准ちゃん、ちよつとかっこよすぎたの。だから准ちゃんに自分のこと「私」って呼ばせたり、女の子の格好させたりしたの。……でも、駄目だった。

全然駄目だった。どんなことしても、准ちゃんは准ちゃんで。かっこよくって。それでもあたし、准ちゃんの好きな「桜子」でいようとしたよ。

でも無理。もう……。ねえ、准ちゃん。あたし、もう……。無理……

多分泣いていたのだろう。それは、走り去ってしまった桜子のせいで、わからなかった。

そして桜子は、姿を消した。准は必死で捜した。太陽は照りつき、色あせ、やがて桜の葉も散り、そして冷たい風が吹く頃になっても、桜子は見つからなかった。

やがて桜の花が咲くころ、准のもとに一通の手紙が届いた。差出人

の名前はなく、なかには半分に折った紙に、花びらがはさんであつた。桜の花びらが。やっと、見つけた。

女

准は、桜の並木道で、少女を待った。生徒たちが通っていくこの桜並木のトンネルを、一年前、准とひとりの少女もまた、通っていたのだ。若い日々を必死に生きながら。花々は俗世のことなぞ知らぬげに、我を称えよと咲き誇る。それが恨めしいような、懐かしいような。少女のいなかった空白を、准は今、取り戻そうとしている。

生徒たちに混じって、大人も花を愛でようと集まっている。若い男女も多い。彼らはこの花を愛するのか、憎むのか。美しく誇らしげに咲く薄紅の花々は、ただただ花弁を散らしていた。

一組の男女が准のほうへ近づいてきた。

「すみません、写真を撮っていただけですか？」

女のほうが話しかけてくる。まあ、写真くらいならいいだろう。

「ああ。いいですよ」

「ありがとうございます。じゃ、お願いしまーす」

そう言うと、男女は並んで、桜の木の下に立った。准はカメラを構え、被写体を捕らえた。男は毛糸で編んだ帽子をかぶり、シャツにジーンズ。顔のあちこちにピアスをしている。女のほうは髪を茶色く染め、ウェーブした髪が痛んでいる。キャミソールにスカート。男も女も、どこにでもいそうな感じた。

「撮りますよ」

カシャ、カシャ、と、二度ほどシャッターを切る。

「撮りましたよ」

「ありがとうございます」

横の男になにか囁くと、女がカメラを受け取りに来た。准はカメラを女に渡すと、もう用はないとばかりにそっぽを向いた。

あいつは、来るだろうか。

あの手紙は、絶対に桜子からのものだ。なにも書かれておらず、差出人も書いてなかったが、准はそう信じた。信じたかった。そして、

桜子はここへ准を呼んだのだ。いつ来るかはわからない。だが、いつまでだって待つ。あの日々が戻るかはわからないが、准は桜子を取り戻したかった。

ふと、傍らに目をやると、先ほどの女がまだ立ってこちらを見ている。

「なんだ。まだ何か？」

「ちよつと、お話したいな〜とか思つて」

女は、上目遣いに准を見る。女独特のその媚が、気持ち悪かった。

「残念だったな。俺は女だ。それに、彼氏が待つてるぞ」

「いいのよ、あんな下衆。あなたのほうが何っ倍もかっこいいし！」

准は舌打ちをした。下衆はどっちだ。男を待たせておきながら、別の人間にちよつかいをかけるとは。

「私は人を待つてる。とつとと失せる」

女は臆した風もなく、

「ひつど〜い」

ふふ、と、紅いくちびるで笑った。

やっかいなのに関わった。そう思ったがもう遅い。こういう手合いは、しつこい。こんなことをして、桜子が行ってしまったらどうする。

「私は人を待つている、と言っただろ。人つてのは、私の女だ」

「え〜。だってあなた、女なんでしょ？」

「だから、そういうことだ」

「うそばかり」

「本当だ」

「うそ」

「いい加減に」

「だって、あたしには振り向かなかつたじゃない。准ちゃん」

目の前が真っ白になった。今、なんと叫びた？ この女は、誰だ？

知らない。こんな女、私は知らない。

真っ青になってしまった准を見て、女はふふ、といたずらっぽく笑

うと、

「わからない？ 違うわよね。わかってて否定したい。そうよ。私は桜子。お久しぶりね、准ちゃん」

あれほど会いたかった人物が、目の前にいる。しかし、准の心を満たしたのは歓喜ではなかった。

この女が桜子だというのが。この女が。

それは最早、少女ではなかった。髪は茶色く痛み、露出の激しい服を身につけ、派手な化粧で男を誘う。男を渡り歩く、毒の花。

「どうしたの？ 私に会えて嬉しくない？

一年ぶりに会えたのに」

准を上目遣いに見る。准の知る桜子はこんな仕草はしなかった。こんな「女」の仕草は。

「あら。嫌がつてるわ。じゃ、しょうがないわね。バイバイ、准」その女はさつさと去ろうとする。

准は、はっと我に返った。桜子が、行ってしまふ。

「さ、桜子、久しぶり……だな」

桜子はくるっと振り向くと、

「やーっと喋ってくれた！」

にこっと笑う。そのほほ笑みに、ひまわりの面影はなかった。

「准、あなた、私がいなくなってから、どうしてたの？」

「あ、ああ。探してたよ……お前を」

「あら、嬉しい」

「それより、あの男は、なんなんだ？」

「べっつに」。 「お友達」のひとりよ。そんなことが聞きたいの？ 違う。准の知る桜子とは、あまりにも違う。

准は半ばめまいを覚えながら、話を続けた。

「私は、お前が姿を消してから、ずっと探してた。一日だって、お前を忘れたことなどなかった。なんでお前は変わったのか、なんでお前は私の前から姿を消したのか、ずっと聞きたかった。なんで……私は、お前に何かしただろうか？」

永遠の少女

桜子は黙って聞いていたが、そこに落ちていた桜の花を拾って、准に差し出した。

「？」

「憶えてる？ 准、あなた、私の髪に、花を挿してくれたのよ。もう一度、それができる？」

「あ、ああ、もちろん……」

准は、桜の花を受け取った。そして挿そうと手を伸ばす。そして、気がついた。

背が、伸びている。あれほど小さかった桜子の背は、もう他の女たちと変わらないまでに伸びている。そして両脇に結わえていた髪は、今は茶色く、パーマと染色で痛んでいた。拒否反応を起こす自分の体を押さえて、准は桜子の髪に花を挿そうとした。

すっと、桜子が准の耳元に口を寄せる。

「大好き。准ちゃん」

「うわああああっ！」

どんと突き飛ばされ、桜子は地面に尻餅をついた。

准は、真っ青になって震えている。桜子はそれを見やり起き上がる、と、

「ひどいなー。女の子突き飛ばすなんて」

その言葉にはっと気がつく、と、

「あ……す、すまない。今度はちゃんとやるから……」

桜子はふふっと笑うと、花を拾い、自分で自分の髪に挿した。

「どう？ 似合う？」

痛んだ髪と、紅い唇に、桜の花は少しも似合わなかった。だが、准は、

「に、似合うよ」

「嘘。今の私に、桜の花は似合わない」

桜子は花を髪からはずし、その場に捨てた。

「ねえ、准。どうして私があなたの傍から逃げ出したのか、知りた
い？」

「あ、ああ」

桜子は、咲き誇る桜並木を見やった。だが、その目はもつと遠く、
手の届かない場所を見ているようだった。

しばらくそうしていたが、やがてぼつりぼつりと話し始めた。

「どこから話せばいいのかなあ。そうね。やっぱり最初から。

始業式の日、あなた、学ラン着てたでしょ。私ね、男の子だと思っ
たの。誰でも思うでしょ、あれじゃ。

そのときは、私がこの不良を叩き直してやろう、ぐらいに思ってた。
でも准は不良なんかじゃなかった。そりゃ、喧嘩はするし教師の言
うことはきかないし、反抗的だし。

でも、そんなワルじゃなかったのよね。だからかな。私、准に惹か
れて。普通に、同姓としてね。今度は、友達になりたくなったの。
楽しそうで。

ほら、あの頃の私、おせっかいだったじゃない。不良とまではいか
ないけど、准みたいな子、ほっとけなかったわ。今じゃ、そんなこ
とないけどね。

それで、私たち、友達っぽくなったじゃない？ そしたらさ、今度
は准が私を気にかけてくれるようになった。

嬉しかったな。優越感も、確かにあったよ。でも、あの時は純粹
に、嬉しかった。私がワルにからまれたら助けてくれて。准、かつ
こよかった。蒼い色って、あんなに綺麗なんだ、って思ったよ。

それだけならよかった。それだけならよかったよ。でもその後・・・
。准は、憶えてる？ 学校の帰り道、男子たちがさ、私のこと噂し
てるわけ。おきまりの、ブスだのチビだの。自分を鏡で見てから言
えっつての。

でも、その頃の私、純情で。笑っちゃう。そんなことで、傷ついた
のよね。目の前真っ白になって。そしたらいつの間にか准、そいつ

らぼこぼこにしちゃってて。

それで桜の花なんか拾って、私の髪に挿して。あれが、やばかったよ。あれで、私にとつての准は、『お友達』から『気になる人』に一気に昇格しちゃったわけ。それから、准に会うのが嬉しくて嬉しくて。

でも、准は他の女とも話すようになった。そいつらが、ものすごい憎かった。嫉妬だったんだよね、つまり。

それでさ、私のほうがいい女だぞって……違うな。もうそのとき、『女』になってたんだ、私。もう、『少女』じゃなくなってた。心がね。

それで、准に、きれいって言われたい。綺麗にお洒落して、准にもっと好かれない。そう思ったの。

なのに准ったら。「お前は子供でいる」だもの。ひどいよね。自分で私を『少女』から『女』にしておきながら、『少女』の私をあなたは求めた。

そんな子、どこにもいなかったのに。准の求める『桜子』なんて、もうどこにもいなかったのに！

あなたさえいなけりゃ……あなたさえ……。准、私、あなたが

—

「やめろ！」

准は咄嗟に叫んだ。聞きたくなかった。「その言葉」を、准は聞きたくなかった。桜子はどこだ？ 俺はこんなところでこんなことをしている場合ではないのだ。桜子に会いに来た。桜子はどこにいる？

「准……」

桜子は、悲しいとも可笑しいともつかない表情で准を見つめた。

「もう一年もたつのに。まだ、『桜子』を探しているの？ もう、いないのよ。もう、あの頃の『桜子』はいないのよ。あなたの思い出のなかにだけ、存在するの。准。だれも、永遠の子供ではいられない。永遠の少女、完璧な少女なんて、いないのよ。早く、気がついて……」

聞きたくなかった。それが真実だったから。ひとは成長する。成長するからこそ、生きていかれる。永遠普遍のものがないのは、人が成長するからだ。そしてそれは、生きていくのになにより必要なことなのだ。だからこそ、ひとは、「大人になりたい」と思うのだ。しかし、准だけは違っていた。成長を望まなかった。准こそが、永遠の少女だったのかもしれない。

「准にこうして会えるまで、一年かかった。でもまだ、忘れられたわけじゃない。好きよ。今も、ずっと。でもいつか、あなたのことを忘れられたなら、その時は、また会いましょう。そしてもう二度と、私のような女をつくらないで。次にあなたが出会う少女に、私のような思いをさせないで。お願い、准」
そう言うと、桜子は背を向け、

「もしかしたら、准、あなたこそが、永遠の少女だったのかもしれない。准。あなたは、私を愛したのじゃない。あなた自身を、あいしたのよ」

待たせてあった男と、腕を組みながら去っていった。

准は、ひとり残された。何も考える気さえせず、ただ、桜子の最後の言葉を繰り返し頭の中で反芻していた。

（あなたは、あなた自身を愛したのよ）

涙も、出てこなかった。准の求めたものは、ではいったい何だったのか。結局、自分自身を求めていたのか。……なんと不毛な。私は、そんなことのために、桜子、お前を苦しめたのか？ 私は、それだけの存在でしかなかったのか？ 私はいったい、どうしたらよかつたんだ……。

答えなど、出なかった。桜子は、もういない。准の求める『桜子』は。さきほど准に会いに来た桜子は、准の知らない女だった。

（あなたはあなた自身を　　）

はは、と、自嘲の笑いが漏れた。だがしかし、桜子を恨む気にはなれなかった。

私は、私自身を愛した。一番醜いと思い、嫌っていた、憎んでさえ

いた己自身を。それは、自分が子供だったからだ。

なあ、桜子。私は、もう、学んだよ。私はもう、自分自身に酔った
りしない。

だから、いつか、会えるかな。私が、自分自身でなく、本当に誰か
を愛せたなら、また、会えるだろうか。

（次に出会う少女に同じ思いをさせないで）

次に出会う少女など、いるのだろうか。俺には、桜子、お前
だけだった。それでも。

（次に出会う）

「わかったよ、桜子」

そして、准は花卉を散らす桜の木を見上げた。

「さよなら」

桜並木を歩み行く後姿は、ひたすら蒼かった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1024c/>

永遠の子供たち

2010年12月25日02時43分発行